残酷な夕日・結城昌治

残酷な夕日・結城昌治

目次

残酷な夕日　七
霧が流れた　五
風が過ぎた　三五
夜か暗いように　一七
一匹の愛　二三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

「文華新書」刊行のことば

新しい宇宙時代に生きる現代人は、今日に強く、さらに明日に逞しく生きるために、どん欲なまでに文化教養の指針を求めています。

この新書は、激動と混乱の時代に知識を整理し、新しい法則を追求し、美と愛、生と死、結婚と性などについて、尊い価値を創造し、生活を豊かにすることを願い刊行するものであります。そして、今日と明日への教養・実益を探求するものと、興趣のつきない読物とを、シリーズとして、文化の華を開かせたいと念願します。

なお「文華新書」の内容、造本など既刊のもの及び今後の刊行について、ご意見などおよせ下されば幸甚です。

残酷な夕日

昭和43年7月22日 発行　　¥280

著者との諒解により検印廃止

© 著者　結城昌治

発行者　大島敬司

印刷所　飯島印刷株式会社

発行所　東京都千代田区丸の内 丸ビル783区　株式会社 日本文華社

TEL 東京・(201)2752 4750 (211)5063　振替 東京 43444 番

○万一落丁，乱丁の場合は，返送次第本社でお取り替え致します。
○小社発行品切れの図書雑誌は近くの書店又は本社へご注文下さい。

残酷な夕日

1

「困るな、矢野さん――」映画館の前で待っていた工藤は、雑踏を避けて裏通りへ曲がるなり矢野刑事に言った。「そりゃあ、おれだって男だから、矢野さんの気持くらいは分る。だけどさ、あんなことをされては困るよ」

工藤の口ぶりはいつもより馴れ馴れしかった。

いったい何を言うつもりなのか。

捜査係の大部屋にいた矢野に、電話で呼出しをかけてきたのは工藤だった。聞いてもらいたい話があると言っただけで、彼は用件を言わなかった。

たぶんご機嫌とりの密告(タレコミ)だろう――矢野はそんな程度に考えて署をでた。

刑事とヤクザとの関係は付かず離れずで、互いに情報を探ぐり合い、利用し合っている。ヤクザの勢力争いに警察が一役買わされることもあれば、その争いに乗じて警察側がヤクザの組織を根こそぎに叩き潰すことだってある。付かず離れずで馴れ合っているようだが、決して持ちつ持たれつではない。

矢野は、工藤の意図をくみかねて次ぎの言葉を待った。

工藤は小さなビルの二階に金融業の看板をかけて正業を装っているが、組長が検挙されて偽装解散した茨組の幹部だった。傷害と恐喝の前科二犯、金融業の看板も、内実は高利貸しと焦げつき債権の取り立て屋だということが分っている。地味な背広にきちんとネクタイを締め、色白のおとなしそうな顔立ちで、一見はその辺のサラリーマンと変らないが、彼の名前を聞いただけで震え上る者がどれほど多いか知れない。

「聞いてくれてるんですか」

工藤が言った。

言葉は丁寧だった。

矢野が二十八歳、工藤の方が三つ年上だっ

た。
「聞いてるさ」
矢野は煙草をくわえた。
「栄子のことですよ」
「栄子の？」
「話はすっかり栄子から聞きました」
「――」
矢野は煙草をくわえたままだった。
火をつけるのを忘れていた。
昨夜の記憶が甦った。
記憶自体は、悪い記憶ではなかった。
――彼は酔っていた、しかし酔い痴れるほど飲みはしなかった。中学時代の同窓会の帰りで、数人の仲間とマンモス・バーで二次会をやり、それからもう一軒寄ったのは何というバーだったか、いずれにしろ大衆的なバーで、そこでいつの間にか知合った女の名が栄子だった。バーのホステスではなく、自分では売れないファッション・モデルだと言っていたが、痩せぎすだがきれいな女で、その女を送るつもりだったのが誘われるまま一緒にタクシーを降りて、彼女のアパー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

トに入るときは、帰りかけた彼の手を女が引っぱったことも憶えている。
女は大胆に脱いだ。
やはり酔っていたせいか、矢野も、今にして思えば大胆に女を抱いた。
それでも刑事という職業柄、彼は抱く前に一応の警戒はした。職業をごくありふれたサラリーマンのように偽っていたし、少くとも所轄署管内で知った女なら抱かなかったに違いない。
彼は時おり娼婦を買う。所轄外へ遠出をして抑えきれぬセックスの欲望を満たすのだ。所轄署の管内で女を買わないのは、もちろんその女が売春防止法違反でパクられてきて顔を合わせたらまずいからだ。
しかし昨夜は所轄外だったし、栄子という女は娼婦にみえなかった。気まぐれにできたような情事を、彼は恋に似た甘さで味わったのである。
彼は腕利きの刑事だが、かつてこのような甘さは知らぬ男だった。そんな出来事は、小説かスクリーンの中でしか起らぬと思っていたのだ。
「まさか忘れたって言うんじゃないでしょうね」工藤はつづけた。「栄子の味はどうでしたか」
「あんた、あの女を知ってたのか」
「知ってたかはひどいな。女をたらすのも結構だが、おれの女に手をだされたんじゃ引っ込みがつかないと言ってるんですよ」

「栄子があんたの女？」
「知らなかったんですか」
「あんたは女房がいる。ほかにも女がいることを知っている」
女房のほかに早苗という女がいて、その女に小さなバーをやらせているのだ。
「早苗とは切れましたよ。きれいに切れたとは言わないが、しつこい女は嫌いでね、このごろは足が遠のいている。おれは栄子にぞっこんだった」
「そいつは知らなかったな」
「知らなかったで済ます気ですか」
「ほかにどうしろというんだ。あの女に聞けば分るが、おれは無理に誘ったわけじゃない」
矢野は強気で言った。
工藤のような連中に弱味をみせると、たちまちつけこまれることを知っていた。
「まるで栄子が誘ったみたいですね。そうトボケられたのでは、せっかく静かに話そうとしてるのにやり難くなるが、昨日の晩、おれはあのバーで栄子を待たせていた。ところが、おれは用があって行けなくなった。栄子は待ちくたびれているうちに矢野さんにからまれた。帰ろうとすると、矢野さんがついてきて送ると言った。仕様がなくて同じタクシーに乗った。
もちろん栄子はひとりで降りるつもりだった。しかし矢野さんは一緒にタクシーを降りてしま

った。栄子は急いでアパートに入ったが、鍵をかける間もないうちに矢野さんに入ってこられた。

あとはおれが話すまでもないでしょう。矢野さんはそれほど酔っていなかった。自分が何をしたか憶えているはずだ。栄子は抵抗したが、到底男の力にはかなわなかった。無理矢理ぬがされたときは諦めてしまった。いや、脱がされる前から、警察手帳を見せられて怖がっていたんだ。栄子の父親は刑務所に入っている。そんな関係もあって、栄子は刑事を怖いものと思いこんでいた。そうでなくても気の弱い女だし、矢野さんが暴力犯係の名うての刑事だということはおれに聞いていたから、抵抗しきれなかったのも無理はない」

「栄子がそんな話をしたのか」

「栄子が話さなかったら、おれが知るわけないでしょう。昨日の晩おそくなって、おれは栄子の部屋へ行った。すると栄子が泣いていた。可哀想に、裸のまま泣いていたんだ。おれは事情をきいた。そして初めて分ったのさ。栄子の部屋に、矢野さんが忘れていったライターがあった」

工藤は、それまでズボンのポケットにつっこんでいた右手をだして開いた。

安物のガス・ライターで矢野は飲み歩いているうちに失くしたと思っていたが、矢野のライターに違いなかった。

2

「栄子に会わせてもらおう」
矢野はけんめいに自分を抑えた。どろどろした熱いものが胸の奥で煮えたぎっているようだった。
「会ってどうするんですか」
「今の話を彼女自身の口から聞きたい」
「いいでしょう。栄子は自分の部屋にいるはずだ」
工藤は通りかかったタクシーをとめた。
タクシーの中では、矢野も工藤も口をきかなかった。
タクシーがアパートの前にとまった。
昨夜、矢野が栄子に誘われて入ったアパートだった。
工藤は、栄子の部屋のドアをノックもせずにあけた。
栄子がいた。水色のセーターは昨夜の服装と違うが、そして昨夜より顔色がわるく沈んでみえたが、確かに矢野に抱かれ、白い華奢な体をのけぞらせて喜悦の声をあげた女に間違いなかった。

栄子は、工藤が矢野をつれてくることを予期して待っていたようだった。矢野の顔を見るなり視線を伏せた。

その様子をみれば、もはや何をきいても無駄だということが矢野は分った。

しかし、それでも矢野は聞かずにいられなかった。

「きみは、ぼくを刑事だと知っていたのか」

「――」

栄子は答えなかった。

「工藤がぼくに喋ったことは、本当にきみが話したのか」

「――」

栄子はやはり視線をそらしたきりだった。

「答えてくれないか。きみは怯えている。工藤を恐れているのだ。しかし本当のことを聞かせてくれないか。そしたら、ぼくはどんなことがあってもきみを守る。昨夜のぼくは見事に騙されたが、きみに対しては怒っていない。きみは工藤に脅されて、彼の言いなりになったに過ぎない。そうだろう。もしそうじゃないなら、ぼくの顔をまっすぐ見られるはずだ」

「――」

栄子は依然俯いたまま、下唇を噛んでいた。

「何とか言ってやれよ、栄子」
工藤が口をはさんだ。
栄子はその声に促されたというより、揺れていた照準の目盛をピタリと合わせたようだった。
栄子は顔を上げた。
まっすぐに矢野を見た。
矢野は愕然とした。栄子の眼が憎しみに燃えていたのだ。昨夜、白い体が弓なりに撓ったとき、あれは快楽の頂上に達した官能の歓声ではなかったのか……。
「分ったでしょう」
矢野のうしろで工藤の声がした。
矢野は無言でアパートをでた。
工藤がついてきた。
一歩外へでれば、往来は信じられぬほど平穏だった。自転車に乗った少年が追越してゆき、腕を組んだアベックが擦違った。
「気がすみましたか」
工藤が追いついて肩をならべた。
「筋書は読めた——」矢野は声を抑えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb